

ミルクの減少を図る

— ミルクの請求方法の変更と授乳記録ノートの活用を試みて —

6の1病棟：矢車草 杉山光枝・田中昭子
石川睦子・清水ちえ子
野々山和恵・成岡知代
斉藤久美子

1. はじめに

6-1病棟は、助産婦14名、看護婦3名、看護助手2名、クラーク1名の計20名で構成されている。昭和62、63年度と2年連続して分娩件数1000件を超え、業務多忙の中、周産期看護の充実をめざし、日夜努力している。QCメンバーは7名で、平均年齢31歳で、油の乗り切ったグループである。

2. テーマ選定理由

当病棟では、新生児の人数分のミルクを請求し、それを3時間毎、温めていた。その為褥婦が母乳を与える前に安易にミルクを与えてしまったり、約半分のミルクが捨てられていたのが現状である。そこでミルクの請求量、消費量、破棄量を減少させる為に、ミルクの請求方法の変更を栄養課と連携して行なった。それと同時に、個別的な授乳ノートを作成し、今まで以上に授乳指導の徹底により母乳栄養の推進を図れた。以上より、「ミルクの減少を図る」を、テーマ選定とした

3. 活動計画とそのすすめ方

毎週火曜日、pm 5時より30分間を、定例会とし、25回開催され、平均出席率92%であった。全員に役割分担を行ない、リーダーが推進する形式とした。

4. 現状把握

ミルクの減少が図れないという問題点を、患者サイド、看護婦サイド、管理体制、哺乳指導方法の四つの視点から分け、図1の特性要因図にまとめた。また、特に問題となる点を○で囲んだ。

看護婦サイドでは、ミルクの請求方法について問題意識を持たない。管理体制では、児の一回哺乳量×7回を人数分、請求している。ミルクの請求量が多

い為、捨てる量も多い。患者サイドでは、人数分ミルクを温めている為ミルクに頼ってしまうことが多い。哺乳指導方法では、哺乳量ノートの記載を時間で決めている。哺乳量ノートが個人別でない。初期哺乳時、糖水よりもミルクをすすめている。が、特に問題となる点であった。ミルクの請求量は一週間で52,040 mlであった。一日平均の請求量7440 mlで捨てる量3690 mlで請求量の49.6%であった。

5. 目標設定

- ①ミルクの請求量、消費量、破棄量を少なくする。
- ②授乳ノートが効果的に使用できる。

6. 対策の検討と実施

1) ミルクの請求方法についての問題点は

- ①ミルクの請求方法に、看護者側に、問題意識がない。
- ②児の一回哺乳量×人数分の請求をしている。
- ③ミルクの捨てる量が多い。

これに対する具体策として、請求方法を、生後日数に関係なく一律に一回の哺乳量を40 mlとし人数分請求した。

2) 哺乳量ノートの問題点は、

- ①哺乳量ノートが個人別でない。
- ②哺乳量ノートの記載が時間毎に決められている。

これに対する具体策として

- ①哺乳量ノートを個人別として、名称も「授乳記録ノート」とする。
- ②大きさは、18.5 cm×13 cmとし、表紙を19.5 cm×14 cmの厚紙で作り、リングでまとめた。又表紙には、母性意識を高めるような絵を書いた。
- ③時間にとらわれず、児がほしい時に、ほしいだ

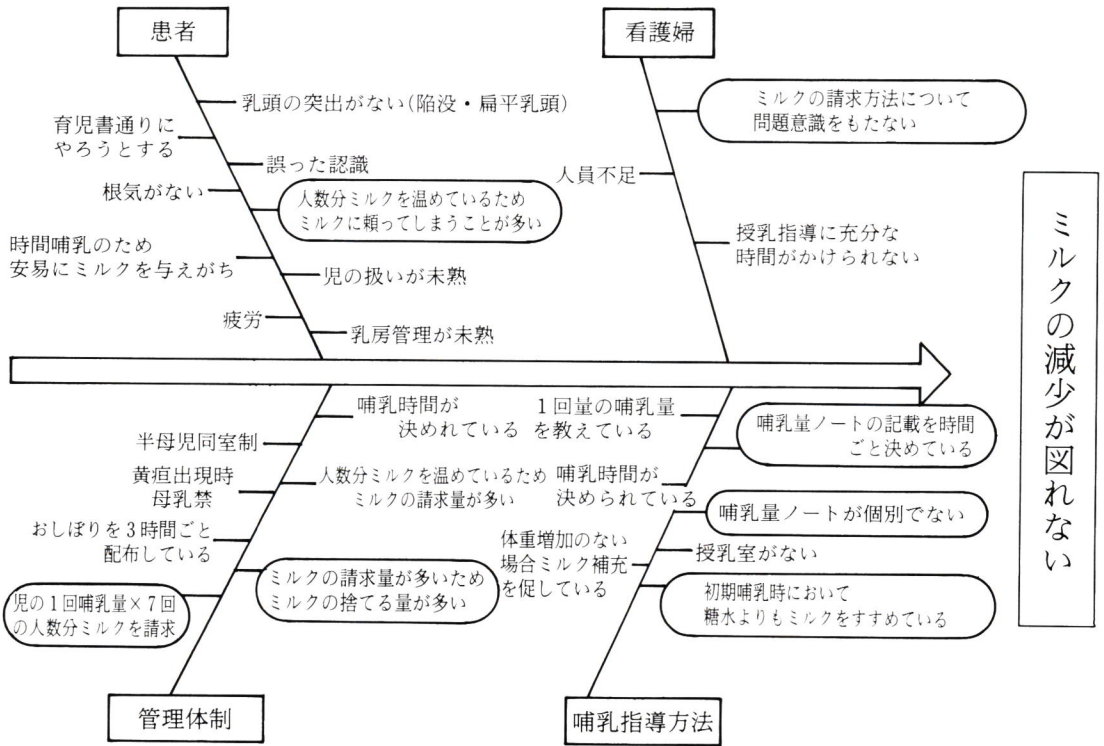


図1 特性要因図

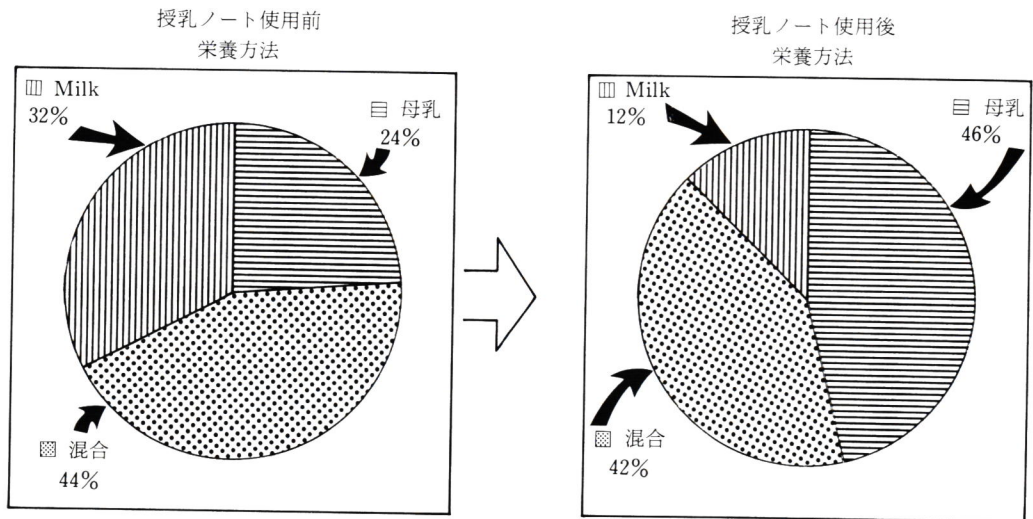


図2

け与える自律授乳方式とし、自由記載とした。

- ④褥婦と看護者との、つながりを深める為指導欄をもうけた。
- ⑤直接哺乳指導時、褥婦個人に、説明し配布した。

7. ミルクの請求方法の変更と授乳記録ノートの活用効果

- ①ミルクを一律 40 ml の請求とした結果、一週間の請求量は 36580 ml となった。
 前回請求方法によると請求量 47480 ml となり、一日平均、約 1800 ml の減少となった。
- ②授乳記録ノートを考案し、活用した結果、自律授乳方式が推進され、褥婦と看護者のつながりが深まり、母乳栄養が増加しミルクの減少へとつながった。

8. 効果確認

- ①ミルクの請求方法を一律 40 ml とした場合、一日平均の請求量が 1800 ml 減少し、破棄量は 2300 ml で請求量の 37.7%であった。
- ②消費量に関しては、退院時栄養方法調査によると、授乳記録ノート使用前には、ミルクのみが 32%であったが、使用後は 12%と明らかに 1/3 の減少があった。(図 2)
- ③コストダウン
 ミルクの購入費は市価の 1/3 であるが、ミルク請求量が 1800 ml 減少したことにより、一日約

540 円コストダウンし、年間では約 197,000 円のコストダウンとなる。

- ④褥婦 50 名を対象に、カードについてのアンケート調査を行なったところ、大きさ、記入具合についても 80%良いという結果であった。
- ⑤授乳記録ノートの活用により、褥婦と看護者のつながりも深まり、母乳栄養の推進がはかられた。
- ⑥栄養課においては、時間的、労作的に大きな負担はなかった。

9. 歯止め

- ①ミルクの請求方法を生後日数に関係なく一律に一回哺乳量を 40 ml とし人数分請求する。
- ②授乳記録ノートを個人別に配布し活用する。

10. 反省

今回の QC 活動は、2 回目であったが、基本的なところから勉強しなおし、活動をすすめた結果、病棟スタッフの相互理解と協力により、病棟の活性化に役立った。着眼点を、ミルクの減少としたことにより改めて、現在の母乳栄養のあり方を見直すよい機会となった。

今後も更に、業務の効率化を図り、又母児への関わりを多く持ち、QC 活動を実践していきたいと考える。